

中学校国語教科書における漢文教材としての「春望」について

大橋賢一

はじめに

現在、中学校国語教科書を出版しているのは《学校図書》
《教育出版》《三省堂》《東京書籍》《光村図書》の五社であ
る。¹⁾五社が共通して採り上げている漢文教材は意外に少な
く、わずかに「矛盾」《韓非子》²⁾だけである。「矛盾」に
次いで、《光村》以外の四社が採り上げている教材に杜甫
「春望」がある。³⁾四社が「春望」を教材として採用してい
るのは、中学校三年の古文教材として松尾芭蕉『おくのほ
そ道』「平泉」の条があり、そこに「国破れて山河あり、
城春にして草青みたり」という「春望」の冒頭二句を踏ま
えた表現が見えることが、その理由の一つになつていよう。
《光村》は「平泉」を採り上げているが、「春望」は注に引
用するに止まっている。⁴⁾中学三年生とはいえ、注に書かれ
ている詩を読んで、「平泉」の内容を理解させようという

のは、教育的配慮に欠けていよう。やはり、生徒の理解を
補い、深めるためには、四社のように教材として「春望」
を採り上げるべきである。

今後も古文教材として「平泉」が教科書に採り上げられ
続ける限り、「春望」もまた教材として、よみつがれてい
くことになるだろうが、ただ、四社の「春望」に対する扱
い方を見比べてみると、書き下し文、口語訳、注釈などに
いくつかの違いがあり、特に口語訳や注釈などに関しては
教科書の記述として、いささか不十分な点の一部あるよう
に思われる。

そこで、本稿では、教科書会社の本文、並びにそれらが
出典としている素材を比較考察することで、漢文教材とし
て「春望」を採り上げる場合の問題点、特に表記や送り仮
名といった基本的な事柄、また訓読の仕方と語句の解釈な
どについて検討し、どのような点を改善するべきか、とい

うことについて私見を述べてみようと思う。

一 書き下し文における表記、送り仮名及び振り仮名について

各社が「春望」の出典として挙げているものは、

● 黒川洋一『杜甫』（岩波書店、一九五七年）⁵⁾

|| 『学図』

● 目加田誠『杜甫』（集英社、一九六五年）⁶⁾

|| 『教育』・『三省堂』

● 宋本『杜工部集』卷九（続古逸叢書所収）

|| 『東書』

の三種の本である。《東書》の指導書が出典として挙げて
いる『杜工部集』は、言うまでも無く原文だけが載って
いるものであり、《東書》が何によって書き下し文を記した
のかは、教科書及び指導書に示されていない。《東書》の
教科書編集部に問い合わせをしたところ、鈴木虎雄『杜少
陵詩集』（国民文庫刊行会、一九二八年）⁷⁾を参考にしつ、
編集委員が書き下しをしたとのことである。なお、目加田
本が底本としているものは、清、仇兆鰲『杜詩詳註』巻四
である。黒川本が底本としているものは特に記されていな
いのでわからないが、本文については『杜工部集』との間

に字の異同はない。以下、『杜工部集』により「春望」の
全文を、句数を付して記しておく。⁸⁾

- 1 國破山河在
- 2 城春草木深
- 3 感時花濺淚
- 4 恨別鳥驚心
- 5 烽火連三月
- 6 家書抵萬金
- 7 白頭搔更短
- 8 渾欲不勝簪

「春望」はテキスト間に字の異同がほとんど無く、二句
目の「春」について、宋の蔡夢弼『杜工部草堂詩箋』など
に「春一作荒」という注記が見える程度である。従って、
教科書本文における字の異同については特に問題は無いの
だが、ただ漢字表記と送り仮名については、出典と教科書
本文の間に違いのあるものがいくつかある。以下、各教科
書と出典の記述をまとめた（表一）（表二）（38・39頁）を
参照しながら、各問題について検討していこう。

まず、漢字表記についてであるが、先に挙げた各社が
出典とした本文では、旧字体が使われているが（ただ黒川
本は書き下し文では新字体を使っている）、四社いずれも
旧字体を新字体に改めている。こうした書き換えは、中学
校の教科書である以上、そうせざるを得ない配慮といえる。

ただ、《東書》が書き下し文において、三句目の「濺」、六句目の「抵」、七句目の「搔」、八句目の「渾」「勝」「勝」を平仮名に改めている点については、適切な配慮とは言えない。「濺」、「搔」、「渾」の三字は「常用漢字表」に含まれない表外漢字である。「抵」と「勝」は常用漢字ではあるが、「常用漢字表」には「抵^かたる」「勝^かふ」という訓読みが記されていない。《東書》は、「常用漢字表」を基準とすることで、これらの字は書き下し文にする際に、平仮名に改めたのだろう。一方で、「春望」には「濺」「搔」「渾」以外にも、五句目の「烽」、八句目の「響」といった常用漢字表の表外漢字が二字含まれている。この二字は名詞として音読みしているために、漢字表記のままにしたのだろうが、とすれば、「濺」「搔」「渾」もルビを振ることで、書き下し文も漢字表記にしたままで構わないはずである。平仮名に改めたからといって、理解しやすくなるというわけでもあるまい。むしろ、漢字表記のままにしておいたほうが、生徒にとっては、それぞれの漢字の持つ意味を理解する手がかりとなり得るはずである。

次に、送り仮名についてであるが、四句目の「恨」、六句目の「抵」、八句目の「渾」について各社に違いが見られる。「恨」については《東書》が「恨みて」とよんでい

るのに対し、他はいずれも「恨んで」と音便化してよんでいる。各社の出典に目を転じてみると、鈴木本は「恨みて」とよんでいるが、黒川本・目加田本は「恨んで」とよんでおり、各社、出典に従っていることがわかる。「抵」については、平仮名に改めている《東書》以外は、《学図》《三省堂》《光村》が「抵^かる」と、《教育》が「抵^かたる」としている。この箇所について、鈴木本は「抵^かす」と、目加田本は「抵^かる」としており、《東書》《教育》ともに出典に従っていないことがわかる。《東書》が鈴木本に従っていないのは、恐らく「抵」に対応する「連」が、「連^{れん}す」とサ変動詞化してよまれることなく、「連なる」と訓でよまれていることが理由の一つになっていよう。こうした出典の改変は、中学生用の教科書としてそうせざる得ないことである。また、「送り仮名の付け方」(昭和四十八年、内閣告示)をみると、「当たる」と記されている一方で、許容という形で「当る」もまた載っている。これに従えば、どちらの送り仮名も認められるから、この送り仮名については、各社が適宜判断をして構わないものといえる。ただ、《教育》のように出典を改めて、送り仮名を付けるのであれば、教科書内ではいずれも「当たる」に統一するべきであろう。⁽⁹⁾

続いて振り仮名ルビの問題について検討しよう。各社

の出典はいずれも総ルビになっているが、教科書では、出典を改め部分的にルビがふられている。三句目の「濺」、五句目の「烽」、七句目の「搔」、八句目の「渾」や、「抵たる」「勝ふ」という「常用漢字表」に訓読みが記されていないものに対して、ルビを付していない教科書はない。また、九句目の「更」を「さら」と訓じるのを学ぶのは、中学校に進学してからである。従ってこの字については、各教科書会社によって既習の字か否か異なるだろうから、各社によってばらつきがでてしまうのは当然のことである。問題はそれ以外の字についてどのような基準でルビをつけるか、ということである。「山河」や「在」、「涙」「白頭」「万金」などについては、音訓について学習済みであることを踏まえると、必ずしもふる必要はないだろう。こうした字にルビが付されるのには、それぞれ理由があるのかもしれないが、特に意図がないのだとすれば、新出の字以外ふらないようにするか、あるいは総ルビにしてよみ方を明示するか、どちらかにして一貫性を持たせるべきだと思う。

二 訓読と口語訳について

訓読に着眼して各社の対応を比較してみると、その違いが最も顕著なものは、五句目の「三月」である。《学図》

は全体の口語訳をつけているが、五句目については「戦いのろしの火は三月になってもまだ上げられ」と訳している。また、《東書》は口語訳を付していないが、「三月に連なり」の注として、「春三月（旧暦）になっても、まだ続いていて」と訳語を補っており、《学図》も《東書》も「三月」を春三月の意としている。

対する《教育》、《三省堂》並びに《光村》には「さんげつ（傍点筆者）」とルビが付されている。《教育》は更に「三月」の注において「三か月。または、長い期間」と記しており、《三省堂》は「烽火三月に連なり」に対する注として「戦乱が三月続いて。（中略）「三月」は三か月間」と記し、《教育》同様、「三か月」と解している。

各教科書会社の出典についてみると、《学図》の出典である黒川本は、「三月」に対して「陽春三月。一年のうちもっとも美しい季節である。一説には三か月間とする」と注を付し、「うちつづくのろし火は三月になってもまだやもうともせず」と訳している。また、《教育》《三省堂》の出典とする目加田本は「連三月」に対し、「一説に陽春三月。戦争が去年以来、この三月までつづいてなおやまぬとし、また一説には烽火がこの三か月間ひきつづいておることとする。今、後説に従う」と注をした上で、「兵

乱の危急を知らずのろし火はこの三か月もつづいてやまず」と訳している。目加田本がなぜ後者の解釈をとったかは判然としない。《東書》が参照したという鈴木本は「連三月」の注に「舊説に三月とは春の第三月をいひ、三箇月をいふに非ずといへり。然れども連三月とし三月を三箇月と解し得ざるに非ず、蓋し作者は至徳元載の極末期に長安に入りこみしなるべく、その家族と別れて以後の計算とみれば暮春の月まで三箇月にて可なり」と記した上で、「烽火は前から今の三月の節まで(或は三箇月)つづいてある」と、春三月説を支持しながらも三箇月説を紹介している。

なお、吉川幸次郎『杜甫詩注』卷三(筑摩書房、一九七九年、二〇〇頁)は、五句目の「三月」について、三箇月説を唱えたのは趙次公、対する春三月説を唱えたのは黄鶴であると指摘した上で、黄鶴に従っている。その理由として、初唐王勃の「物色は三月に連なり、風光は四隣を繞る」(「仲春郊外」という句を先例としてあげ、「仲春二月きさらぎの風物が、次の三月やよいにも連想するのをいふ」と説明する)。

右のように、各教科書会社はそれぞれ出典に従って、「春三月」あるいは、「三箇月」の意味で解し、後者の場合は特にルビを付してそのことを明示している。「春望」が古

典詩である以上、いくつかの解釈があることは当然のことであるし、むしろ解釈がいくつかにわかれることが古典の魅力の一つとなつてゐることは間違いない。ただ、教科書に採り上げることからするならば、教科書ごとに解釈が異なつてゐるのは、やや問題があるのではなからうか。個人的には、題名が「春望」であること、また吉川氏が指摘するように先行例があることを踏まえると、やはり「春三月」と解するほうが自然のように思われる。いずれにせよ、教科書に載せるのであれば、中学校の段階では解釈を統一するか、あるいは二種類の解釈がある、ということを経験しておいたほうが無難であろう。

三 脚注、解説、挿し絵などについて

脚注について問題があるものとして、まず詩題の「春望」が挙げられる。《教育》《三省堂》《東書》の三社は脚注に「春望」をあげ、いずれも「春の眺め」という注をつけている。一方《学図》だけは、この語句を注にあげていない。《学図》は本文を引用した後に口語訳を載せるが、詩題の口語訳は載せていない。「常用漢字表」では、「望」には「のぞむ」という訓がただであり、「眺望」としての「ながめ」という訓はない。「望」が「ながめ」という意味で使われ

ることは、中学生にとつてあまりなじみがないだろうから、やはり注をつけるのが適切であろう。詩題は作品の本文に入っていないとしても、作品の一部として本文と同じように扱うべきである。

次に問題が指摘できる語句は、「城」と対になっている一句目の「国」である。《学図》は「国」に対し「国の首都、長安。当時、反乱が起きて首都は破壊されていた」と記す。他の三社は「国破れて」に対し、「国都長安が、安祿山の乱のために破壊されて」(《教育》)、「国の都が破壊されて」(《三省堂》)、「唐の都長安(今の西安市)は反乱軍に攻め破られて」(《東書》)と注記している。各出典の注釈を見みると、鈴木本、黒川本、目加田本のいずれも「国」に対して注を付しており、それぞれ「國都をいふ」「國都長安のこと」「國都」と記しているから、教科書の注はいずれも出典に従ったのだろう。この「国」についての解釈であるが、先に挙げた吉川『杜甫詩注』や一海知義『漢詩一日一首 春夏』(平凡社、一九七六年)などが指摘しているように、これが明らかに長安城を指す「城」と対比されていることを踏まえると、「国」を「城」と同じようにとらえて「長安」と解釈するよりも、「國家」という大きな単位で解釈するほうが適切であろう。さらに、首聯が対

句になっていること、また二句目で城が「草木」という小さなものに対比されていることに対して、国がより大きな「山河」と対応していることなどを考慮すると、スケールの大きな対比が引き立ち、首聯二句の対比がより鮮やかになるだろう。出典の解釈に則る事も大切ではあるが、対句という修辞を、効果的に生徒に説明するためには、「国」を「國家」と解釈するべきである。

「国」に対応する「城」もまた、中学生にとつては理解しがたい語句の一つと思われる。多くの中学生が「城」をみて真っ先に思い浮かべるのは、城壁で囲まれた街ではなく、「大坂城」などのような、建造物としての日本独特の城であろう。《教育》以外は、「城」を脚注に取り上げて、「城塞都市。中国の都市は、長安をはじめ城壁で囲まれていた」(《学図》)、「城壁で囲まれた都市。「国」「城」はともに当時の都、長安(現在の陝西省西安市を指す)」(《三省堂》)、「城壁を巡らした、昔の中国の都市。また、町の中。ここでは、長安の町の中」(《東書》)という注を付している。「城」に関しては、この程度の脚注はつけるべきである。

次に末句の「渾欲不勝簪」であるが、この語句については《学図》以外の三社が脚注に取り上げている。「髪の毛が短くなって、簪もさせないほどになっている。「簪」は

冠を髪に留めるためのピンのようなもの」(《教育》)、「全く簪を挿すこともできないほどだ。『簪』はここでは冠を留めるピンのこと」(《三省堂》)、「全く、髪を結つても、簪(かんざし)を固定させるためのピン」で冠をとめることができなくらいである」(《東書》)と、各社いずれも句の全訳を挙げた上で、簪を詳しく説明している。《学図》は恐らく全訳を載せているから注に取り上げなかったのだろうが、ただ挿し絵を脚注部分に載せている。最近の教科書は、傾向として、グラビアを多く取り入れ、ほとんどのページをカラーにしている。《教育》は本文の背景に夕暮れどきの湖畔の風景を載せるが、そうした工夫をするぐらいなら、むしろ《学図》のような当時の髪形を載せる方が、生徒の理解を助けるように思う。

まとめ

中学校の教材として「春望」を採り上げる事の是非に関しては、例えば、安東俊六氏が、この詩が、杜甫の四十六歳の時の作品で、中学生と年齢が隔たつているときに作られたものであること、また現在の日本が平和であるということ、また現在の内容が凝縮された二句が引かれることを踏まえた上で、「果たして今日の中学生にどれほどの共感をもって、この詩は読まれているのであろうか」

(17) 批判的な意見を述べている。氏がいうように「春望」は、中学生にとつて、難易度が高く、必ずしも適切な教材とはいえないのかもしれない。しかし、氏のいう難易度からすれば、芭蕉が四十五歳のときの旅を綴つた『おくのほそ道』もまた、中学生と年齢が格段に離れたときに書かれたものという点で、杜甫「春望」と同じである。中学生が共感できるかできないかという基準をもつて教材を選ぶとすれば、古典はもとより現代のものでさえ、現在教科書に載るほとんどの作品を、再検討しなくてはならなくなるだろう。

冒頭にも述べたように、「春望」が中学生の国語教材として採り上げられているのは、芭蕉『おくのほそ道』『平泉』が教材になっているからにはかならない。周知の通り、「平泉」は、奥州藤原氏の旧跡を訪れた芭蕉の、平安末期に栄華を極めた藤原氏の面影がすっかりなくなつたことに対する感慨が記されている条である。「春望」の冒頭は、栄枯盛衰を繰り返す人間と、そのこととは無縁であるかのように存在する自然が鮮やかに対比されている佳句である。「平泉」では、こうした内容が凝縮された二句が引用されていることで、唐代の中国であろうと、江戸期の日本であろうと、普遍的に人間というものの存在自体のはか

なさが巧みに表現されている。芭蕉が、しばしば中国の詩を引用する意図は、様々な視点から考えることができるだろうが、ともかく、芭蕉の表現方法と密接に関わっていることはいうまでもない。中学校の授業において、他者の文を引用することの効果について、細かく分析させる必要はないまでも、表現効果を考えさせるといふ点では、「平泉」は格好の材料といえよう。

そもそも、中学校で漢文が教材として採り上げられているのは、日本の古典文学との関わりからである。「平泉」が教材として採用され続ける限り、芭蕉の理解を深めるためも、さらに言えば、江戸期における日本人の文学當為に對する理解を深めるためにも、杜甫「春望」を外すわけにはいかないはずである。今後も「平泉」の理解を深めるために、「春望」が教材として採り上げられることになるのであれば、これまで検討してきたいくつかの問題について、改めるべき点は改め、よりよい教科書作りをしていかなくてはならないと思う。

(筑波大学附属中学・高等学校)

注

(1) 《学校図書》《教育出版》《東京書籍》《光村図書》の四

社については、以下、《学図》・《教育》・《東書》・《光村》と略称する。

(2) 「矛盾」の問題点については拙稿「中学校国語教科書における教材としての「矛盾」について」(『新しい漢字漢文教育』三九号、二〇〇四年)に論じたので、そちらを参照していただきたい。

(3) なお、漢詩は、教材として各社が必ず採り上げている。「春望」以外については、李白「黃鶴樓送孟浩然之広陵」を《教育》(三年)・《東書》(三年)・《光村》(二年)が、杜甫「絶句」を《三省堂》(二年)・《光村》(二年)が、王维「送元二使安西」を《学図》(三年)が、孟浩然「春暁」を三省堂(二年)・《光村》(二年)が、李白「静夜思」を《学図》(三年)が採っている。

(4) 教科書名は『中学校国語3』(《学図》)、『中学国語 伝え合う言葉3』(《教育》)、『現代の国語2』(《三省堂》)、『新しい国語3』(《東書》)、『国語3』(《光村》)で、いずれも二〇〇二年出版。

(5) 以下、この本については黒川本と略称する。

(6) 《三省堂》が出典としているものは『漢詩選九 杜甫』(集英社、一九九六年)で、名称が異なるが、中身は『漢詩大系9 杜甫』(集英社、一九六五年)に同じ。以下、この本については目加田本と略称する。

(7) 以下、鈴木本と略称する。

(8) 漢字表記については、いずれも原文通りに記すことに

した。

- (9) 《教育》には、例えば「石が彼の足に当たった」(辻仁成「新聞少年の歌」一年、一〇三頁)、「ミットの土手に当たつたらしい」(赤瀬川集「一擧手の生還」三年、一二三頁)というように「あたる」の例がみえる。それぞれの出典をみると、前者は仮名表記になっていて『そこに僕はいた』角川書店、一九九二年)、後者は教科書本文の表記に一致している『ダイヤモンドの四季』新潮社、一九八九年)。このように《教育》は出典を改める場合、「あたる」については「たる」と送るように統一している。
- (10) 例えば、「山河」に「さんが」とルビをふるのは《教育》の一社だけであるが、これは出典の目加田本が「さんか(傍点筆者)」と清音でよんでいるのを改めたからだろう。
- (11) 吉川氏は趙次公、黄鶴の注文自体は載せていない。趙次公は「考此詩作於天寶十五載之正月、蓋安祿山反於十四載之十月、至是則烽火連三月」と述べている(『杜詩趙次公先後解輯校』上海古籍出版社、一九九四年)。一方、黄鶴は「當是至德二載三月陷賊營時作」と述べている(黄鶴補注『集千家注分類杜工部詩』杜詩叢刊第一輯)。
- (12) このことはすでに仇兆鰲『杜詩詳註』が指摘している。
- (13) 《東書》だけが「眺め」とルビをふっている。なお、「眺」は常用漢字で、「表」に「ながーめる」という訓があるから、ルビをふる必要はない字である。
- (14) 吉川氏は「国家の組織の破壊を「国破る」という」(一九三

頁)と、また、一海氏は「「国破」について。国都長安の破壊とする説、国家機構の崩壊とする説などがある。(中略)杜甫以前のこの語の用例や、「国」と「城」との対比関係から考えて、後説がよいであろう」(一三四頁)と述べている。

- (15) 《三省堂》は、「長安」や「西安」などを現代中国語音に基づいてルビをふっているが、国語の教科書であるから、現代中国語音に基づく必要はないだろう。《学図》《教育》のように「長安」は「ちようあん」と音でよむべきである。《東書》は「長安」については「ちようあん」と、「西安」については「シーアン」とルビをふる。あくまでも現代中国語音に拘泥するならば、この程度に収めておくべきだろう。なお、地名のルビについては、注二であげた拙稿でも若干触れた。
- (16) 《教育》は、「渾」を除く「欲不勝簪」の注である。
- (17) 「中学校における漢文教育の再検討(続)」(『岐阜大学国語国文学』二九号、二〇〇二年)。

【表一】※《光村》は、「春望」を「平泉」の条に注として引用しているだけなので左端に参考として載せた。

《光村》	《東書》	《三省堂》	《教育》	《学図》	教科書名 本文
河在り 国破れて山	河在り 国破れて山	河在り 国破れて山	河在り 国破れて山	河在り 国破れて山	① 國破山河在
草木深し 城春にして	草木深し 城春にして	草木深し 城春にして	草木深し 城春にして	草木深し 城春にして	② 城春草木深
を濺ぎ 時に感じて は花にも涙	をそそぎ 時に感じて は花にも涙	を濺ぎ 時に感じて は花にも涙	を濺ぎ 時に感じて は花にも涙	を濺ぎ 時に感じて は花にも涙	③ 感時花濺淚
心を驚かす 別れを恨ん では鳥にも	心を驚かす 別れを恨み では鳥にも	心を驚かす 別れを恨ん では鳥にも	心を驚かす 別れを恨ん では鳥にも	心を驚かす 別れを恨ん では鳥にも	④ 恨別鳥驚心
連なり 烽火三月に	連なり 烽火三月に	連なり 烽火三月に	連なり 烽火三月に	連なり 烽火三月に	⑤ 烽火連三月
抵る 家書万金に	あたる 家書万金に	抵る 家書万金に	抵たる 家書万金に	抵る 家書万金に	⑥ 家書抵萬金
更に短く 白頭搔けば	更に短く 白頭かけば	更に短く 白頭搔けば	更に短く 白頭搔けば	更に短く 白頭搔けば	⑦ 白頭搔更短
と欲す 渾へて簪に 勝へざらん	と欲す すべて簪に たへざらん	と欲す 渾へて簪に 勝へざらん	と欲す 渾へて簪に 勝へざらん	と欲す 渾へて簪に 勝へざらん	⑧ 渾欲不勝簪

【表二】※出典としている教科書名を括弧にいれて左に示した。

出典 本文	鈴木本 《東書》	黒川本 《学図》	目加田本 《教育》 《三省堂》
① 國破山河在	國破れて山河在り	國破れて山河在り	國破れて山河在り
② 城春草木深	城春にして草木深し	城春にして草木深し	城春にして草木深し
③ 感時花濺淚	時に感じて花にも涙を濺ぎ	時に感じて花にも涙を濺ぎ	時に感じて花にも涙を濺ぎ
④ 恨別鳥驚心	別を恨みて鳥にも心を驚かす	別れを恨んで鳥にも心を驚かす	別を恨んで鳥にも心を驚かす
⑤ 烽火連三月	烽火三月に連なる	烽火三月に連らなり	烽火三月に連なり
⑥ 家書抵萬金	家書萬金に抵す	家書萬金に抵たる	家書萬金に抵る
⑦ 白頭搔更短	白頭搔けども更に短し	白頭搔けば更に短く	白頭搔けども更に短く
⑧ 渾欲不勝簪	渾て勝へざらむと欲す	渾べて勝へざらんと欲す	渾べて勝へざらんと欲す